

水環境館いきものトピック Vol.4

ちんぎょほうこく

珍魚報告シリーズ

ホシフグ&タツノオトシゴの仲間

令和3年3月1日若松区のとある漁港で、普段は深い海に生息するホシフグが見つかったとの情報をいただきました。この魚はイカ釣りの際に、エギとよばれる仕掛けに掛かったもので、採取直後は生きていたようです。数年に一度大量発生することや、皮膚や卵巣に毒があることなどが知られていますが、深い海に生息することもあり詳しい生態はあまり解っていません。また水族館でも、定置網に入った個体がたまに飼育される程度で、生きた個体はなかなか見られません。日本海側では主に冬頃の漂着例が多いため、水温や海流など、何らかの影響で沿岸にやってくると考えられています。



また、門司区にある周防灘に面した岩場では、今まではほとんど見られなかったタツノオトシゴの仲間が、ここ数年で頻繁に発見されるようになりました。タツノオトシゴは別名「海馬(うみうま)」とも呼ばれ、魚と思えない姿から人気の高い魚ですが、海藻がたくさん生える岩場に住んでおり、体も小さいため、なかなか出会えない魚でもあります。実際にこの岩場で見られるものは、写真のようにしっぽを丸めた状態で大きさが3.5 cmほど小さく、黒っぽい色をしていることから見つけるのも一苦労です。

なぜ、ここ数年で数が増えたのかは分かりませんが、日本近海の海水温の変化が原因のひとつと思われます。タツノオトシゴの仲間には冷海域を好む種と暖海域を好む種がありますが、この地点では他に、暖かい海を好むヒョウモンダコや魚が相次いで見つかっており、海の様子の変化が感じられます。今後も水温の変化に伴って、今まで見られなかった生き物が増えることも考えられます。

※冬は水温が低下するため動きが鈍くなり、いろいろな生き物が浜辺に打ち上がることがあります。また、時化(海が荒れること)や台風の後、海流のコース変動などによっても海水がかき混ぜられ、生き物が打ち上がりやすくなります。こうして、普段は目につかない深海魚やの大型海洋生物が打ち上がると「天変地異の前触れだ」という声が挙がりますが、科学に基づいた確かなデータはありません。また、今回紹介した生き物が温暖化の影響で姿を現したとも言えません。生き物と自然現象との関係は未解明な部分が多いですが、研究が進めば、いつかは人々の暮らしに役立つことがあるかもしれません。みなさまもぜひ日頃から、周りの環境に目を向け、観察してみてください。

